【歴史から未来へ導く】

「錦江町と桜島」

～大正噴火99年の歴史を振り返る④～

今月は、「田代町誌」「大原小学校創立120周年記念大原物語」「みんなの桜島」からの情報をもとに制作しました。

田代大原地区方面へ車を進めると、その沿道には約3キロに渡り色付き始めた紅葉を眺める事ができる。

その大原地区には、大正噴火により移住してきた集落が3集落ある。現在の中尾・内ノ牧・久木野集落である。現在ではどの集落も道路が整備され大根占方面からも約20分程で行き交う事が出来るが…

噴火から移住へ

大正3年1月12日の大噴火の様子は田代地区でも観測できた。

学校の朝礼が始まると北方に爆音とともに、黒煙が立ち昇るのが見え、尋常科高学年と高等科の先生・生徒は大根田下の採石場の有る尾根続きのシリシ岳へ行き、真っ黒な噴煙がたな引く様子が観測できた。（町誌中野純吉談抜粋）

噴火後、被災者は新城村（現在の垂水市）へ避難、新城小学校や寺院・民家、県の建設した避難住宅（20棟）に居住していたが、桜島への帰郷をあきらめ、移住が決まった。

西桜島村赤水集落・東桜島村脇集落は内ノ牧・中尾集落へと移住が決まり、4月15日、家族一同「種子島丸」で出発、大根占の上ノ浜に上陸し田代村へと向かった。荷馬車を頼み、でこぼこ道を荷馬車の後ろを歩いて向かい大変な思いをしたとある。

中尾・内ノ牧の移住から約1か月後の5月13日、西桜島村の藤野・武・松浦地区などの方々は避難先の重富小学校から「大川丸」に乗り久木野地区へ向かったとある。

東桜島村の瀬戸という大きな集落で、戸数326戸、人口千三百人以上住み半農半漁の平和で静かな生活を営んでいた。お盆には男は裸になり船を漕ぎ、若い女性は三味線太鼓を船に乗せ桜島一周の船漕ぎ競争が行われ楽しい一時を過ごしました。…最後の避難通報、浜では魚やタコが赤くなり浮いていた。私たちも海水に手をつけ熱いのに驚きました。牛や馬はそのまま馬屋につなぎ、垂水・牛根・鹿児島方面に分かれ避難しました。…到着すると周りは雑木林や竹やぶばかり。開墾、開墾の毎日。食糧も不十分でしたが、新田・大原地区の方々から米や甘藷を分けてもらい何とか生活が出来る毎日。開墾地で作物が採れるようになったときはみんなが心から喜びました。（町誌中尾集落山野オ三蔵談）

内ノ牧・中尾に移住してきた瀬戸・脇集落は、薩摩藩の造船所があった場所でもあり、白地に朱色の日の丸を最初に掲げた「昇平丸」を造船したところでもある。

活気に沸く大原地区

大原地区は、〝鹿児島開拓の縮図〟と言われるほど開拓移住者の多い地区である。姶良郡や与論町、指宿や満州引上げ者など大勢の方が開拓移住地としてきている。

大正3年の大噴火移住により、田代尋常小学校大原分教場（現在の大原小学校）は児童数20名前後から大正4年には202名になり、複式学級が解消されたと記載されている。

国有林野が多かったため製炭業が盛んになり、現金収入を得ることができたとある。しかしながら製炭業の低迷とともに人口が減少し、昭和38年（児童数388名）をピークに児童生徒は減少していった。来月からは、現在住んでいる方々に話を聞いていきたいと思います。

錦江町の歴史や言い伝え、昔の遊びや行事など、特集を組んで取り上げていきたいと思います。町史や各資料より調べ掲載していきますが、掲載した内容と違う見解の資料などありましたら、錦江町役場企画課広報へご連絡ください。錦江町の歴史や文化をひも解き、観光や地域づくりに繋げていきたいと思います。また、個人でお持ちの歴史的資料や写真、言い伝えなどありましたら、取材や調査にいきたいと思いますのでご連絡ください。

【問い合わせ先】　錦江町役場 企画課　TEL 0994-22-3032